

洗う。水につかった米を炊くと半分腐った匂いがして、それを一年間食べた。

経営圧迫のため、ますます生活が苦しくなり農業高校を一年で退学した。

帰ってきて間もなく、木の崎の土地買収の話がもちあがる。組合執行部の努力がみのり買収も終わり、水田造成工事をして配分になった。一戸当たり一町二反から八反歩の配分により二町歩を耕作、夢もふくらんだ。その頃より経営も安定し、生活にゆとりが出来てきた。

その後ライスセンター計画の話が持ち上がりスムーズに決まり、工事も順調に進む。実際にコンバイン刈取り作業が始

開拓五十年を顧みて

大八洲丸が共に拓き共に築く大漁旗を上げて菅生町浅間山港を出港したのは五十年前。船はボロだが理想は高き開拓精神。佐藤組合長を中心に組合員一同信じ合い、先々幾多の苦難にも遭ったが堪え忍び、安住の港を求めて挫折せず来られたのは、共同生活の力だと思えます。

幾多の水害、何カ月の苦労が水泡となり、海のような圃場を見た時、無情な天をしみじみと恨んだ。時には挫折時には希望を失いかけたこともしばしばあった。その都度励まし導

まると、やはり大型機械は基盤整備がしていないため無理があった。

基盤整備計画があったがいろいろ問題があり、完成したのは佐藤組合長が亡くなって十三年後に完成の日の目を見る。

五十年代に入りますます国際化になり、農産物の自由化、とくに米の自由化、二千年には完全な米の自由化になり、政府買上げ米は二百万トン止まりで、それ以上は個人の自由販売になるようで、農家および組合は重大な時期に入り、ますますの経営努力が必要である。

最後に第一世の方々には五十年間の御苦勞に対し心から感謝いたします。

庄司利男

いていただいた組合長さんに只々頭の下がる思いです。

秋には五十周年、大八洲丸は只今一生懸命航行中です。開拓は名実ともに成長しました。しかし、最近農業経営も農産物の海外からの輸入自由化により極めて厳しいものがあります。先輩が築き上げた大八洲開拓丸の舵をしっかりと握り、進路をあやまらずに焦らず急がず開拓百年に向かって新しい船出といたしましょう。

壮なる二世若き三世の皆さん、この難関を乗り越えられんこ

とを期待します。人生はさりげない程難しいといえます。水は無味無臭で毎日飲むことができる。米は淡白であればこそ常食となる。水は全ての生物に生命を与え、大地を潤し、一滴一滴の水が大河となる。米は幾先年の古来から人間の糧として人命を支えてきた。農業は未来永遠に続く開拓者の天職と心得ます。

晩年という下り坂をトボトボと歩くのではなく、頂上を見

昭和二十七年に入植

昭和二十七年二月六日、一年中で一番寒い時期、大雪の降る中夜汽車にゆられて今は亡き柴田さんと叔母と姉と一緒に守谷の駅に着いたのは、たしかお昼過ぎだったと思います。

あの当時はバスの便とてなく歩くことが当り前の時代でした。着いた日は雪こそ降らないが、ものすごい風。進む方向から吹いてくる風に息も止まりそうで、話かけるにも大変。叔母と姉は不安気に私の顔を見る。あの人のいい柴田さんが私達に気を使って黙って歩き続ける。滝下の渡舟場に着いた時、姉と叔母が顔を見合わせて言葉も出ない様子。私はしらぬ顔で柴田さんの顔を見たら何も言わずにじっと私の顔を見ていた。なんだか気の毒になり、思わず「風流だな——」と言ったら、黙って笑みを浮かべたのを思い出します。

上げて登って行く果てに死があるとか、正直なところ長患いもせず苦しまずコロッと逝きたいなあと妻と話をする今日この頃。年のせいかなあ…… 人生八十年とか、まだ先は長い。若い気持で節制な生活をと分かってはいてもなかなか難しいが、お陰様で健康に恵まれ酪農に精出している毎日です。

平成八年一月六日記

庄司 キン子

あの日は旧暦の年越しでした。皆さんに迎えられ柴田さんの六畳一間の部屋に小さな火鉢があり、木の小枝を燃して休ませていただきました。

姉達は何も言わずに顔を見合わせているばかり。私は多少の覚悟はしてきたものの不安がないと言ったらうそになりませぬ。正直なところ心細くて仕方ありませんでした。叔母と姉の不安な気持を掻き立てるように外の松の枝にうなり声たてて吹きまくる北風。あの時の姉達の落ち着かない様子が今でも頭の中に浮かんできます。

夜半に風も去り、朝起きたら昨日の風がうそのような良いお天気でした。朝食をいただいてから高橋政吉さんの馬車に乗せてもらって組合長宅まで挨拶に行き、最初に言われた言